

# 2人の音楽「育ての母」

## 恩師に恵まれて

桜田淳子さんの追っかけ生活をやめ、甘ったれた心を入れ替えて湘南学園高校（神奈川県）の音楽コースの門をくぐった15歳の私は、「指揮者になるんだ」という大きな希望で心が弾んでいた。ところが…。

意気揚々とクラスに入ると、10人くらいいた1年生のうち、男子は私1人。女生徒たちは3、4歳の頃から音楽教室に通って勉強してきた人ばかりで、基礎的な力が身に付いている。専門的な訓練をしてこなかった私はいきなり劣等生だった。

この音楽コースを創立し、大切に育成してきたのが音楽教師の故小川尚子先生で、私の恩人だ。四六時中、早口でしゃべっているような活発な先生で、厳しかったけど優しさがあった。

### テストでさらし者

私なりに授業を頑張っていたも、音楽の基礎体力がないから初めは全然できない。小川先生も個性的だから、ペーパーテストをして結果が出ると、成績の悪い生徒から順に、みんなの前で呼び出していく。

「広上さん20点！ まだまだ

## さすらいマエストロ

広上 淳一

### の 独り言



⑤

ひろかみ・じゅんいち 1958年東京生まれ。東京音大卒。26歳でコンドラシン国際青年指揮者コンクール優勝。欧米各地のオーケストラで客演し、米コロンバス交響楽団音楽監督、京都市交響楽団常任指揮者などを歴任。2015年サントリー音楽賞。22年9月、オーケストラ・アンサンブル金沢（OEK）のアーティスティック・リーダーに就く。東京音大指揮科教授。両親は富山市出身。

全然分かってませんね」って甲高い声で言われて、さらし者のような（笑）。同級生からも「大丈夫？ そんなじゃ指揮者になれないよ」って心配される始末。私は恥ずかしいからうつむ

いて、ウンウン…とうなるしかなかった。

それでも、音楽三昧の時間はうれしくてしょうがなかった。音楽理論の勉強だけでなく、レコード鑑賞の時間も目いっぱいあった。3、4時間かけて、ベートーベンの交響曲全集を聴くとか、オペラの一節を歌うとか。みんなが一緒になって、一つの家族のように育っていく感覚だった。湘南に吹く気持ちいい風のように、生徒も先生もおおらかな人が多かったんだ。

それでも、音楽コースの学友たちは私から見たらエリート。「とてもかなわない」と自信が持てない毎日を送る中、私が音楽への情熱を心に灯し続けることができたのは、ピアノという命綱があったからだろう。その力をつけてくれたのが、小学生の時、父親の転勤先の仙台で個人的に習っていたピアノ講師の松田馥子（旧姓・相沢）先生だ。

東京芸大のピアノ専攻を卒業した松田先生は、落ち着きなく厄介なガキンチョだったはずの私にとっても丁寧に忍耐強く、レッスンをくれた。押し付けではなく、包み込むような優しさでも言おうか。私は次第に稽古に行くのが楽しくなり、知らず知らずのうちに鍵盤楽器を弾く力と音楽的な感性が育まれていったように思う。

### 「武器」手にした実感

ピアノの基礎力は大きな助けになった。今から思うと、とても心もとない技術だけど、弱くても「武器」を手にしている実感を得ていたことが私にとって大事だったのだ。その武器を一緒になって作り、磨いてくれた松田先生に私は一生、頭が上がりません。

話を高校の小川先生に戻そう。小川先生は数年前に96歳、私の母親と同じ年齢で他界した。晩年も私が指揮する演奏会に車椅子に乗って聴きにきてくださり、最後まで凜と立っていた。小川先生と松田先生。2人は出来の悪い私を辛抱強く育ててくれ、心から感謝している。間違ひなく、私の音楽の「育ての母」といえる存在だ。

厳しくも優しくかった小川先生（左）と高校時代の私。小川先生と過ごした日々は私の一生の宝物だ（広上さん提供）



（旧姓・相沢）先生だ。

高校1年のある時、小川先生の教え子でパリ帰りという新進気鋭の作曲家の個人レッスンを受けるよう、小川先生から勧められた。その人こそ、当欄で私と交互にエッセーを連載している池辺晋一郎先生とも親交が深かった故尾高惇忠先生。私の音楽の「育ての父」である。